

ゴゴリの「ロマン主義」解釈

諫 早 勇 一

ゴゴリとロマン主義をめぐる問題は既に陳腐になりかかっている。今日多くの研究者たちがゴゴリの作品にロマン主義的要素を指摘しているし、ホフマン、ティーク、スコット、ジャン、アーヴィングなどさまざまな作家たちとのつながりは、もはや常識と言ってよい。かつてはリアリズムに対立するものとしてロマン主義を過小評価していたソ連の批評家たちも、ゴゴリの作品に現われたロマン主義的要素を積極的に認め始め、¹⁾「ロシア文学において、プーシキン、レールモントフ、ゴゴリ（中略）といった最も偉大な代表者たちの名がロマン主義と結びついている」といった記述は、²⁾今では珍しくなくなっている。

とはいえ、こうした一般的傾向の中で、いまだに抜け落ちている部分があることも感じない訳にはいかない。C. Proffer は 1967 年に発表された論文「ゴゴリのロマン主義定義」の冒頭で、ゴゴリとロマン主義の問題は確かに盛んに論議されているとは認めながらも、「しかし、ゴゴリが『ロマン的』の語にどのような内容を結びあわせたのかは誰も見極めようとしなかった」と指摘している。つまり、ゴゴリに限らず一般に作家の作品の上に反映した他の作家の影響の問題にこれまで多くの関心が注がれていて、「ロマン主義運動のロシア的現われの輪郭を見定めようとする」⁴⁾試みは少なかったように思われる。同じように、Leighton も「ロシアのロマン主義」と題した 1975 年のエッセイの中で、純粋に文学的な影響関係（バイロン、スコット、ユゴー、ホフマン等）はよく知られているが、批評や理論の面での影響関係（シュレーゲル兄弟、コールリッジ等）はよく知られていないと述べ、⁵⁾ロシアのロマン主義運動を批評や理論の面から全ヨーロッパ的に位置づける試みの立ち遅れを指摘している。⁶⁾

ただ、近年特にソ連本国において、運動としてのロシアロマン主義の研究は急速に進歩をとげ、⁷⁾1979 年に「ロシア文学におけるロマン主義史」と題された二冊本が出版されるに至って、⁸⁾従来の欠陥はかなり補われてきている。しかし、話をことゴゴリに限るなら、まだ彼の批評活動をロマン主義運動の中でとらえようとする試みはほとんどなく、⁹⁾ゴゴリの「ロマン主義」解釈をめぐるでも、Proffer の研究がそのまま繰返されたりしているのが実情である。ところが、私見によれば、Proffer の見解はゴゴリの発言に現われた「ロマン主義」、¹⁰⁾「ロマン的」の語の使用を機械的に追うばかりで、ゴゴリの批評活動全体の中でのロマン主義の位置づけには誤解も少なくないように思える。そこで、本稿ではまず Proffer の論への批判を手がかりに、ゴゴリにとっての「ロマン主義」の意味を探ってみたい。

ロシアの文芸批評で「ロマン主義」の語が用いられるようになったのは、1816 年 ヴァーゼムスキイがオーゼロフの悲劇にこの語を適用してからと言われるが、¹¹⁾いわゆるロマン主義論争は 1820 年代に入ってから、特にプーシキンの『ルスランとリュドミーラ』（1820）、『カフカスの捕虜』（1822）をめぐる白熱化した。そして、ヴァーゼムスキイの他、ベストーージェフ＝マルリンスキイ、ソーモフらが古典主義に抗してロマン主義の意義を訴えた。ところが、この論争も 1830 年代に入ると沈静化をたどる。¹²⁾また、ゴゴリが文壇にデビューするのもちょうどこの 1830 年代にあたる。そして、1831 年 8 月プーシキンにあてた手紙でゴゴリはこう述べている。

「今わが国の雑誌で行なわれているように、こんなふうにするのです。『とうとうロマン主義が古典主義に決定的に打ち勝ち、大見えを張ったフラン<スの>コーランの擁護者たち（ナデー・ジュジンのような）が消える時が来たようだ。イギリスではバイロンが、フランスでは果てしなく偉大なヴィクトル・ユゴー、デュカンジュらが客観的生活を描く中で、わかち難く個別的な現象の新世界を再現した。（後略）』」¹³⁾

1830年のフランスでのエルナニ事件はロシアにも大きな衝撃を与えた。¹⁴⁾ ゴーゴリの手紙はこれ以後ロシアのジャーナリズムでもロマン主義の決定的勝利が宣伝されていたことを推測させる。だが、果して Leighton の指摘のように 1820 年代末までにロマン主義論争は終息し、¹⁵⁾ ロマン主義の問題は批評の問題としては廃れていたのだろうか。¹⁶⁾ 以後のポレヴォーイ、ナデー・ジュジンらの批評活動¹⁷⁾ を考える時、必ずしもこの見解をそのまま受け入れる訳にはいかないが、1831～36 年に一つのまとまった批評活動を行なったと考えられる¹⁸⁾ ゴーゴリが、「ロマン主義」という語をほとんど用いていないことは Proffer の指摘の通りである。¹⁹⁾

ただ、そこから Proffer が指摘し、Leighton が賛同しているような、²⁰⁾ ゴーゴリがロマン主義論争およびロマン主義という概念そのものをむしろ軽蔑的に忌避していたという結論を引き出すことは単純にはできない。このためには、プーシキンに典型的に現われた「真のロマン主義」をめぐ²¹⁾ る論議も当然考慮されなければならないし、フランス的なものとドイツ的なもの、詩、演劇、小説などジャンル²²⁾ の問題にも注意が払われなければならない。

では、具体例に即してこの問題を考えるために、Proffer も引用している「1835～36年におけるペテルブルグの舞台」（以下「舞台」と略す）に表わされた²³⁾ ゴーゴリの唯一ともいえる「ロマン主義」解釈を以下に訳出してみたい。（この部分は決定稿となった「1836年のペテルブルグ雑録」では削除されている。）

「しかし、²²⁾ ドラマとはヴォードヴィルとは何か、これらのわが19<世紀>の私生児がどうして生まれたのか、見てみよう。これはロマン主義の排泄物だと言われている。しかし、ロマン主義とは何か？ <今>世紀の初めの25年の終わりはずっとそれについて論議され、これは作品のある種類のようなものにまでな²³⁾ って、この戯曲はロマン的だが、これはロマン的でないと²³⁾ 言われた。これには古典主義が対置された。このことの奇妙な不適切さは誰でも知っている。しかし、ロマン主義と呼ばれていたものは何だったのだろうか？ これは、古代作家の創作に現われる社会や人々の模倣のおかげで全く離れてしまったわれわれの社会に、もっと近づこうとする志向に他ならなかつた>。古代世界と新しい世界の全<国家>が持っていた全く同じ志向である。」

ここでロマン主義は古典主義に対立するものとしてではなく、古典主義が古代世界に近づこうとしたのと同じように、近代の社会に近づこうとした志向としてとらえられている。つまり、この部分にはロマン主義への否定的態度は少しも見られない。しかし、これにつづく以下の部分には、論議を呼ぶいくつかの叙述が含まれている。

「この志向への移行、即ち最初の激発と試行は、社会の反乱を担うようなやたらに大胆な人によってたいがい行なわれる。彼らは風俗や習慣に似合わない不適合の形式を見ると一切を

越えて裂け目に押し入る。彼らは限界を知らない<?>で、考慮なくすべてを壊し、不正を正そうとして逆にむしろ害をもたらす。彼らは自分たちの作った混沌の中で犠牲者として最初に倒れる。彼らの名前は純粋な思い出の数には残らない。しかし、彼らは混沌を育成<して>、そこからは後になって偉大な創造主が、賢い二重の眼で朽ちたものと新しいものとを包みこみ、静かに思慮深く新しい建造物を創り上げる。創作の中で多くの作家たちは、ここの>ロマン的大<胆さ>によって、新しい言葉に呆然として考える間のなかった社会を驚嘆させもした。しかし、彼らの間から偉大な才能者が現われるや、才能者は芸術家の偉大な靈感にみちた静けさをもって、ロマン的創作を古典的な、というより、明瞭で、鮮明で壮大な創作に変えた。このようにウォルター・スコットはこれを実現したし、もし同じような思索する平静な知性を備えていたら、バイロンも大規模になしとげたことだろう。現在の動揺からも、三重の経験を身につけた未来の詩人が同じように実現するだろう……」²⁴⁾

ヴァシーリイ・ギippiウスはこの「古典的な、というより、明瞭で、鮮明で壮大な創作」を「新しい古典主義」(новый классицизм)²⁵⁾と考え、これをリアリズムと同一視した。また Proffer はゴーゴリにとってロマン主義者は「ニヒリスト」だと考え、ゴーゴリは「古典的」の語を「すぐれた質の」という意味で用いていると主張した。²⁶⁾これに対し、ここにロマン主義の否定を見ないで、「ゴーゴリはスコットを、全般的な破壊と否定のロマン主義と対立する真のロマン主義の代表者と考えた」と説くステパノフのような見方もある。²⁷⁾つまり、前二者はここにゴーゴリのロマン主義への否定的態度(反対にリアリズムや古典主義が讃えられる)を見てとるのに対し、後者はロマン主義そのものではなく、「破壊と否定のロマン主義」を斥けて、「真のロマン主義」(истинный романтизм)を擁護していると考え。そして、僕自身もこのステパノフの意見にくみしたい。

1924年に今日なお名著とうたわれるゴーゴリ²⁸⁾論を書いたギippiウスが、後にソ連公式理論に基づいて大幅に見解を修正させた論文「ゴーゴリの創造の道」で行なった指摘はことさら論じるに値しないが、Profferの解釈にはいくらか反論の必要があるだろう。

私見によれば、彼の論旨の欠陥は前半部分の過小評価に起因している。彼はロマン主義を「われわれの社会に、もっと近づこうとする志向」だったとする前半の主張を軽視して、後半の初めの「すべてを壊し、不正を正そうとして逆にむしろ害をもたらす」との部分にそのままゴーゴリの「ロマン主義」観をあてはめようとする。しかし、後半の最後にウォルター・スコット、バイロンの名が挙げられていることから明らかなように、後半部分はロマン主義が克服されて新しい文学潮流が形成されていく過程を描いたというよりむしろ、ロマン主義内での文学潮流の変遷を描いたものと考えられる。とすれば、ステパノフの見方のように、初期の否定のロマン主義からより成熟したロマン主義、いわば真のロマン主義が抬頭する過程を描いたと見る方が自然ではなかろうか。また、Profferは「ロマン的創作を古典的な、というより、明瞭で、鮮明で壮大な創作に変えた」という部分から、機械的に「ロマン的」に対する「古典的」の優位を引き出しているが、前半部分によれば古典主義は古代人の生活、ロマン主義は近代人の生活に近づこうとする志向なのだから、これを「古典主義」の「ロマン主義」に対する優位に直結させられるはずがない。従って、敢えてこじつけめいた用語を使えば、ゴーゴリがよしとしたものは「古典的ロマン主義」(классический романтизм)だと言えよう。そして、このことは当時の批評界から考えても決して不自然ではない。

プーシキンの「真のロマン主義」の概念は、1830年代になるとナデージュジン、ポレヴォーイらにうけつがれ、ナデージュジンは血なまぐさい事件などを好んで描く傾向を「偽ロマン主義」(лжеромантизм)と呼んで否定した²⁹⁾し、ポレヴォーイも死人、盗賊などを描く文学というロマン主義の狭い概念に反対し、ロマン主義をより広い包括的な文学運動だと考えた³⁰⁾。そして、ポレヴォーイはロマン主義の第一条件を「描写の真実」だとして、「現実世界の人間の深い理解」³¹⁾を要求した。一方、ナデージュジンも「現実の人間」の描写の要求からロマン的の詩が生まれたと主張しており³²⁾、これらは「われわれの社会に、もっと近づこうとする志向」がロマン主義だったと考えるゴゴリの見解とも遠くない。

更に、ナデージュジンがロマン主義の歪められた概念に反対しながら、ロマン主義的原理と古典主義的原理の統合をめざしていたことを思えば、ゴゴリが「古典的ロマン主義」を念頭に置いていたと仮定することは決して不可能でない。結局、先に引用したゴゴリの論述の後半部分から、ゴゴリの「ロマン主義」に対する否定的態度を結論する Proffer の論理は、承服し難い多くのものを含んでいる。

もう一つ Proffer の論文に見られる大きな疑問点は、フランス的なもの、演劇、ことにヴォードヴィル、メロドラマに対するゴゴリの否定的態度を、ゴゴリのロマン主義に対する態度と直結させようとしている点である。Proffer によれば、ゴゴリにとって「ロマン的」とは「effect にみちている」³³⁾ことである。そして、このような effect の否定、即ち「ロマン主義に対する攻撃は、ゴゴリ自身の創造的成熟への移行を示している」と彼は考える。更に Proffer は、1834年をもってゴゴリは 1' école frénétique (熱狂派)の影響を脱し、effect を非難するようになって、1835~36年はゴゴリの成熟した芸術観の発展にとって重要な一歩をしるしている³⁴⁾と言う。だが、ゴゴリの effect 攻撃³⁵⁾をロマン主義攻撃とつなげられるのだろうか。Proffer のこの見解には、ゴゴリの芸術観の変化をめぐる看過できない誤謬が含まれていると思われる。

まず effect に関して述べるなら、ゴゴリは既に1835~36年以前から文学における effect に関して否定的だった。例えば、『アラベスキ』(1835)に発表された論文「ポンペイ最後の日(ブリュローフの絵画)」(1834)においても、ゴゴリは「19世紀は effect の世紀と言える」と述べ、絵画のような視覚芸術に関して「effect は何よりも有効である」³⁶⁾としながらも、「しかし、精神の眼にさらされる作品にあっては、話は全然別である」と主張して、文学における effect の有効性は否定している。また1832年のダニレフスキイあて手紙では、「結婚前の愛、これはヤズィコフの詩だ。それは effect 的で、火のようであり、最初からものは全感情を包みこむ」のに対し、「結婚後の愛、これはプーシキンの詩だ。それはすぐにはとらえないが、よく見れば見るほど開かれ、発達し、遂には広大な海と変わる」³⁷⁾と語られ、明らかに effect にみちたヤズィコフの詩より、プーシキンの詩が高く評価されている。

つまり、「舞台」で「下劣な淫蕩さに麻痺させられた粗野でひからびた本性に働きかける effect」³⁸⁾として攻撃されるメロドラマ、ヴォードヴィルの effect (具体的には殺人、徒刑、火事などの異常な事件が念頭に置かれている)³⁹⁾に対する否定的態度は、決して1835~36年に生まれたものではない。そして、ここで忘れてならないのは、こうしたゴゴリの攻撃のほこ先が常にフランス的なもの、演劇、ことにヴォードヴィル、メロドラマに向けられていることである。

ゴゴリはネージンの学校時代には、友達どうしフランス作家のあだ名で呼びあっていたと言われるが⁴⁰⁾、その後はフランスの作家に好意的な記述はほとんど残していない。従って、おそらくモリエールを唯一の例外として、フランス作家には否定的だったと考えられる。そして、彼は同

時代のフランス文学をヴォードヴィル、メロドラマのイメージと直結させて、激しく攻撃する。例を挙げれば、「舞台」でもヴォードヴィルは「自己の性格の中に深い特徴を持たない、はっきり言えば、国民性を持たないフランス国民の間にのみ生まれることができた⁴⁸⁾」と語られている。また、7巻選集(1966～67)で「19世紀の20～30年代にヨーロッパ文学、芸術において支配的傾向となったロマン主義をさす⁴⁹⁾」と解された「全ヨーロッパ文学に落ち着きのない波立つような趣味が広まった。軽はずみで脈絡なく子供っぽい(中略)創作が現われた⁵⁰⁾」(「1834年と1835年の雑誌文芸の動向について」)という個所も、文脈から明らかなように「フランス現代文学⁵¹⁾」の非難に他ならない。

そもそも、ロマン主義の定義を論じた前述の文の冒頭にも、ドラマ(メロドラマ)とヴォードヴィルは「ロマン主義の排泄物だと言われている」と述べられていた。つまり、Profferの指摘とは違って、effectにみちているものはヴォードヴィルであり、メロドラマであり、これら「ロマン主義の排泄物」と言われるものである。となれば、否定すべきはロマン主義ではなく、その排泄物、その鬼子、歪められたロマン主義ではなかろうか。Profferの解釈はあまりにも機械的に感じられる。更に言えば、こうしたゴゴリのeffectの否定は決してロマン主義美学からの成熟を示すものではなく、異常なものを描くより、「ありふれたもの」(обыкновенное)を「ありふれていない」相の下に描き出すというロマン主義的美学の主張に他ならない。

決定稿「1836年のペテルブルグ雑録」の中で「殺人、火事、今日の社会には少しも見あたらないような最も野卑な情欲⁵²⁾」といってメロドラマ、ヴォードヴィルのeffectを攻撃したゴゴリはそこでまたこう語っている。

「理解し難いことだ、ふだんわれわれをとりまくもの、われわれと離れ難いもの、ありふれたもの(обыкновенно)に気づくことができるのは、深い、偉大な、非凡な(необыкновенный)才能だけだとは。しかし、滅多に起きず、例外的で、均整のとれた中で醜悪さと不整合とによってわれわれをひきとめるものは、双手で凡庸がとらえている⁵³⁾。」

ここでは非凡な才能者と凡庸者とが対置され、ありふれたものをとらえるのは前者だけであり、後者はeffectにみちた異常なものしかとらえられないと対照的に図式化されている。しかし、このような図式は決して1835～36年のゴゴリの芸術観の成熟によって初めて生み出されたものではない。同じ論旨は『アラベスキ』に収められた「プーシキンについて数言」(1834)にもうたわれている。次の文はどうだろう。

「(前略)はなはだ自然な理由から、滅多に見ないものがいつもわれわれの想像力に強く訴えるとはいえ。そして、異常なもの(необыкновенное)よりありふれたもの(обыкновенное)を好むことは、詩人の損になる——自分自身に対してではなく、多数の民衆に対して損になる——ことを除けば、もはや何ともない。詩人は少しも自分の尊厳を失わないし、おそらくもっと多くの尊厳を獲得さえできるだろう。ただし、ごくわずかの真の評価者の眼の中でだけ⁵⁴⁾。」

ここでは、ありふれたものを好む詩人は少数者に評価されるだけだと述べられるが、これも詩人=天才対俗衆⁵⁵⁾というロマン派的な図式の延長上にある。次に、しばしば引用される以下の文は

どうだろうか。

「なぜなら、対象がありふれていればいるほど（обыкновеннее），そこから異常なもの（необыкновенное）をひき出し、しかもこの異常なものが全く真実であるためには、詩人はより崇高でなければならないのだから。⁵⁶⁾」

既に引用した各文と見比べれば明らかなように、これは決して一部で喧伝されるような「リアリズム美学の道へと向かう巨歩⁵⁷⁾」ではなく、むしろ、凡庸人は effect に目を奪われ、異常なものにばかり目を向けるが、詩人=天才は人が気にとめないようなありふれたものを異常なものに変容⁵⁸⁾できる、という理論であって、一つは詩人=天才の思想⁵⁹⁾、もう一つは想像力による現実の変容という共にきわめてロマン的な観念の表出に他ならない。従って、かつて言及したことがあるが、この思想がワーズワースの「『抒情的バラード』の序」にうたわれた「想像力のある種の色どりをそえて、ありふれたものを尋常ならざる様相で心に映ずるように示さなければならない」という主張や、シェリーが「詩の擁護」で述べた「詩は見なれた対象を、みなれていないかのようにする⁶²⁾」との見解などと一種の共通性をもつのは偶然ではない。そしてまたロシアで見ても、1829年にプラクシンは「最近のロシア文学概観」の中で、靈感にみちた天才は「ありふれた眼には隠されたものをあばき、鋭い異常な（необыкновенные）⁶³⁾特徴を表現できるという、ゴーゴリと非常に似かよった見方を述べている。

結局、少なくとも1836年まで「ロマン主義」、「ロマン的」という語こそ積極的に用いてはいないが、ゴーゴリがこれらの概念に否定的だったことを示す事実は見あたらない。むしろ、この時代はロマン主義が「ヘゲモニーを確立した⁶⁴⁾」時期であり、文学より消化が遅れていた批評や理論の分野でもヨーロッパの知的発達に追いつこうとしていた時代だった。ただ、新しい要素⁶⁵⁾が加わったとしたら、それはこれまで詩の理論、想像力の理論⁶⁶⁾として発達してきたロマン主義の射程に演劇、小説といった別のジャンルが入ってきたことだろう。ゴーゴリが「ロマン主義」の語の使用を避けたとしたら、それはこうした新しいジャンルを包括する概念がまだ成熟していなかったためとも考えられよう。実際、ゴーゴリの演劇観はおどろくほど「古典的⁶⁷⁾」でさえある。

ルネ・ウェレックはヨーロッパ各国における「ロマン主義」、「ロマン的」の語の成育とロマン主義運動とのかかわりを述べながら、運動自体とその語の定着が必ずしも一致しないことを明らかにした。例えば、イギリスではロマン派詩人のいずれも自らをロマン主義者とは考えていなかったし、ロマン主義という語もイギリス文学を指すものとしては使われていなかった⁶⁸⁾と言う。そのような対応で言えば、ゴーゴリは自己をロマン派とは考えていなかったし、ロマン主義の語を自己の文学とからめて用いたことは一度もない。しかし、彼がロマン主義の概念を過去のもの、既に過ぎ去った文学を表わすものと考えていたと言うこともまたできない。彼が最初の批評活動を行なった1831～36年は創造の自由、想像力の重視、国民性の強調などを主内容とした詩の理論としてのロマン主義が既にヘゲモニーを確立し、ユゴーの劇、スコットの小説なども包含する新しい理論を模索しながら、「真のロマン主義」、「偽ロマン主義」といった概念が沸騰していた時代だった。そして繰返すが、ゴーゴリが否定したものは effect にみちたヴォードヴィル、メロドラマに代表されるフランス文学、「ロマン主義の排泄物」、偽ロマン主義であり、決してロマン主義そのものではなかった。また、彼の批評活動も全ヨーロッパ的なロマン主義理論の枠

を越えるものでなかった。ゴーゴリがロマン主義の概念に懐疑的であり、ロマン主義の否定から彼の芸術観の成熟が生まれたと見る Proffer の主張には大きな疑義があると考えられる。

注

- (1) 拙稿書評「《К истории русского романтизма》(《Наука》, М. 1973.)」。「ロシヤ語ロシヤ文学研究」第7号, 1975, PP. 117~120 参照。
- (2) Гуревич, А. Романтизм в русской литературе. М., 1980, стр. 12.
- (3) Proffer, C. Gogol's Definition of Romanticism. In Studies in Romanticism, 1967, p. 120.
- (4) Mersereau, J. Pushkin's Concept of Romanticism. In Studies in Romanticism, 1963, p. 24.
- (5) Leighton, L. Russian Romanticism: Two Essays. The Hague, 1975, pp. 23-24.
- (6) Карташова も同様の指摘をしている。см. Карташова, И. Гоголь и романтизм. В кн.: Русский романтизм, Л., 1978, стр. 62. もっとも, Григорьян のように, 「ロシアのロマン主義はおのれの理論と美的論述を創らなかつた。その『概念』はポレヴォーイやナデージュジンの批評論文より, その最も著しい代表者たちの創作に求めなければならぬ」と説く論者もいる。
см. Григорьян, К. Судьбы романтизма в русской литературе. В там же, стр. 14.
- (7) 例えば, 日本の概説書(岩波文庫「ロシヤ文学案内」, 明治書院「ロシアの文学」, 朝日出版社「ロシア文学案内」)でおなじみのロマン主義の二分(積極的と消極的, 市民的と貴族的など)は, 今日多くの研究者によって否定されている。
см. Маймин, Е. О русском романтизме. М., 1975, стр. 22
Григорьян, указ. статья, стр. 12. Гуревич, указ. кн., стр. 7
- (8) История романтизма в русской литературе. I(1790-1825), II(1825-1840), М., 1979. 以下 История I, История II と略す。
- (9) ゴーゴリの批評理論について触れた Курилов の論文も, 公式的見解に支配されている。
см. Курилов, А. Теоретико-литературные взгляды русских писателей первой половины XIX в. В кн.: Возникновение русской науки о литературе. М., 1975, стр. 403-411.
- (10) Cf. Leighton, op. cit., p. 13, 35.
- (11) см. История II, стр. 18-19.
- (12) Каменский は1830年代半ばまでに発展サイクルを終えたとしている。
см. Каменский, З. Русская эстетика первой трети XIX века. В кн.: Русские эстетические трактаты первой трети XIX века. Том II, М., 1974, стр. 61.
- (13) Гоголь, Н.В. Полное собрание сочинений. М., 1937-52, Том. 10, стр. 203-204. 以下ゴーゴリの引用はこの全集により, 巻とページ数を示す。
- (14) см. Заборов, П. Французская романтическая драма в России 1820-1830-х годов. В кн.: Эпоха романтизма. Л., 1975, стр. 126-132.

- (15) cf. Leighton, op. cit., p. 88
- (16) cf. Ibid., p. 10.
- (17) ベストウージェフもまた1833年に古典的とロマン的の対立について触れている。
cf. Proffer, op. cit., p. 121.
- (18) ゴーゴリの批評活動は1831年の「女性」に始まり、1836年に国外に出る（二度の短期
帰国を除けば、1848年まで帰国しない）までに主要な活動は終わっている。
- (19) Proffer, op. cit., p. 121.
- (20) Leighton, op. cit., p. 13.
- (21) см. История I, стр. 248.
- (22) 14巻全集によれば、メロドラマのこと。
- (23) Том. 8, стр. 553.
- (24) Там же, стр. 553-554.
- (25) Гиппиус, В. Творческий путь Гоголя. В кн.: Гиппиус, От Пушкина до Блока. М.-Л., 1966, стр. 115.
- (26) Proffer, op. cit., p. 123.
- (27) Степанов, Н. Романтический мир Гоголя. В кн.: К истоки русского романтизма. М., 1973, стр. 201.
- (28) Гиппиус, В. Гоголь. Л., 1924.
- (29) см. История II, стр. 254.
- (30) см. Там же, стр. 243.
- (31) см. Там же, стр. 253.
- (32) Полевой, Н. О романах Виктора Гюго и вообще о новейших романах. В кн.: Русские эстетические трактаты.
- (33) см. История II, стр. 233.
- (34) см. Там же, стр. 248.
- (35) см. Там же, стр. 247.
- (36) Proffer, op. cit., p. 125.
- (37) Ibid.
- (38) Ibid., p. 126.
- (39) ナデージュジンも эффект を攻撃していた。см. История II, стр. 231.
- (40) Том 8, стр. 108.
- (41) Том 8, стр. 109.
- (42) Том 10, стр. 227.
- (43) Том 8, стр. 556.
- (44) см. Там же, стр. 555.
- (45) см. Анненков, П. Литературные воспоминания. М., 1960, стр. 59.
- (46) Мориエールは1820年代後半の「モスクワ通報」でも讃えられていたと言う。
см. Гиппиус, указ. кн., 95.
- (47) Прушкинもフランスロマン派詩人に軽蔑的だったと言う。
cf. Mersereau, op. cit., p. 38

- (48) Том 8, стр. 552.
- (49) Гоголь, Н.В. Собрание сочинений в семи томах. М., 1966-67, Том 6, стр. 553.
- (50) Том 8, стр. 171.
- (51) Там же, стр. 172.
- (52) Там же, стр. 182.
- (53) Там же.
- (54) Там же, стр. 53.
- (55) см. Гуревич, указ. кн., стр. 9.
- (56) Том 8, стр. 54.
- (57) Собрание сочинений в 7 томах. Том 6, стр. 516.
- (58) см. Карташова, указ. статья, стр. 65.
- (59) см. История I, стр. 257.
- (60) 拙稿「知られざるゴーゴリ」, 「新日本文学」, 1979年6号, P.62 参照。
- (61) Halsted, J. (ed) Romanticism. New York, 1969, p. 74.
- (62) Ibid., p. 88.
- (63) см. История II, стр. 238.
- (64) Proffer, op. cit., p. 127.
- (65) cf. Leighton, op. cit., p. 26.
- (66) ロシア文学, 特にゴーゴリと想像力については, 拙稿「ゴーゴリと想像力」, 「ジュラール」, 1976年, 第2号参照。
- (67) cf. Proffer, op. cit., p. 122.
- (68) cf. Wellek, R. The Concept of Romanticism in Literary History. In Concepts of Criticism. New Haven, 1963, pp. 145-150.